

平成 29・30 年度 東広島市教育推進指定校
東広島市立志和中学校 教育研究会

研究主題

『主体的に学び、自己有用感を育てる道徳教育の創造』
～「考え、議論する」道徳の指導及び評価の工夫を通して～

研究紀要



平成 30 年 11 月 22 日 (木)

東広島市立志和中学校



目次

はじめに	1
1 研究の概要	2
(1) 研究構想図	2
(2) 研究主題設定の理由	3
(3) 研究主題	3
(4) 研究仮説	3
(5) 研究内容	3
(6) 検証の視点と検証方法	4
(7) 研究経過	5
2 取組の実際～「考え、議論する」道徳の授業づくり～	6
(1) 道徳的価値を自分のこととして考えさせる工夫	6
① 「特別の教科 道徳」の目標と目指す授業とは	6
② 平成28・29年度の取組	7
③ 平成30年度の取組	9
(2) ローテーション道徳の実践による指導方法の工夫と授業力の向上	11
① 「ローテーション道徳」とは	11
② 平成28年度の取組	11
③ 平成29年度の取組	12
④ 平成30年度の取組	14
(3) 教科化における評価についての取組	14
① 評価の方向性について	14
② 平成29年度の取組	14
③ 平成30年度の取組	16
3 検証	19
(1) 生徒は、「道徳の時間」において、主体的に取り組み、「考え議論する」ことにより 自己の考えを深めているか	19
(2) 生徒は、自己肯定感・自己有用感を高めているか	23
(3) 授業者は、「道徳の時間」における指導と評価の一体化が図れたか	24
4 研究の成果と課題	27
(1) 研究の成果	27
(2) 今後の課題	27
おわりに	29
ご指導いただいた先生方 研究同人	30

はじめに

本日は、東広島市内の小中学校の先生方をはじめ、県内各地から多数の先生方、地域の皆様にご参加をいただき、教育研究会が盛大に開催できますことに、心から感謝申し上げます。

本校は、平成 29・30 年度東広島市教育推進指定校の研究指定をいただき、研究主題に、「主体的に学び、自己有用感を育てる道德教育の創造～『考え、議論する』道德の指導及び評価の工夫を通して～」を掲げ、研究を進めてきました。

来年度より中学校は「特別の教科 道德」（道德科）が全面実施となり、「考え、議論する」道德への質的転換が求められています。

そこで本校では、新学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」を視点とした道德教育を目指すこととしました。具体的には、「考え、議論する」道德の指導方法の工夫として、道徳的価値を自分のこととして捉え、多様な考え方に触れたり伝え合ったりすることにより、価値理解と生き方について考えを深める授業づくりを推進しました。

さらに、評価方法の工夫として、「主体的・対話的で深い学び」を視点にティーム・ティーチングによる見取りを行い、個人内評価に迫る手順等を研究してきました。

本日は、その取組の一端を公開し、これまでの研究のまとめを報告させていただきます。皆様から忌憚のないご指導とご助言をお願いいたします。

終わりになりましたが、本校の研究推進にご指導いただきました、香川大学教職大学院教授 植田和也先生、兵庫教育大学大学院教授 谷田増幸先生をはじめ、きめ細かな指導をいただきました広島県教育委員会、東広島市教育委員会の諸先生方に衷心より感謝とお礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

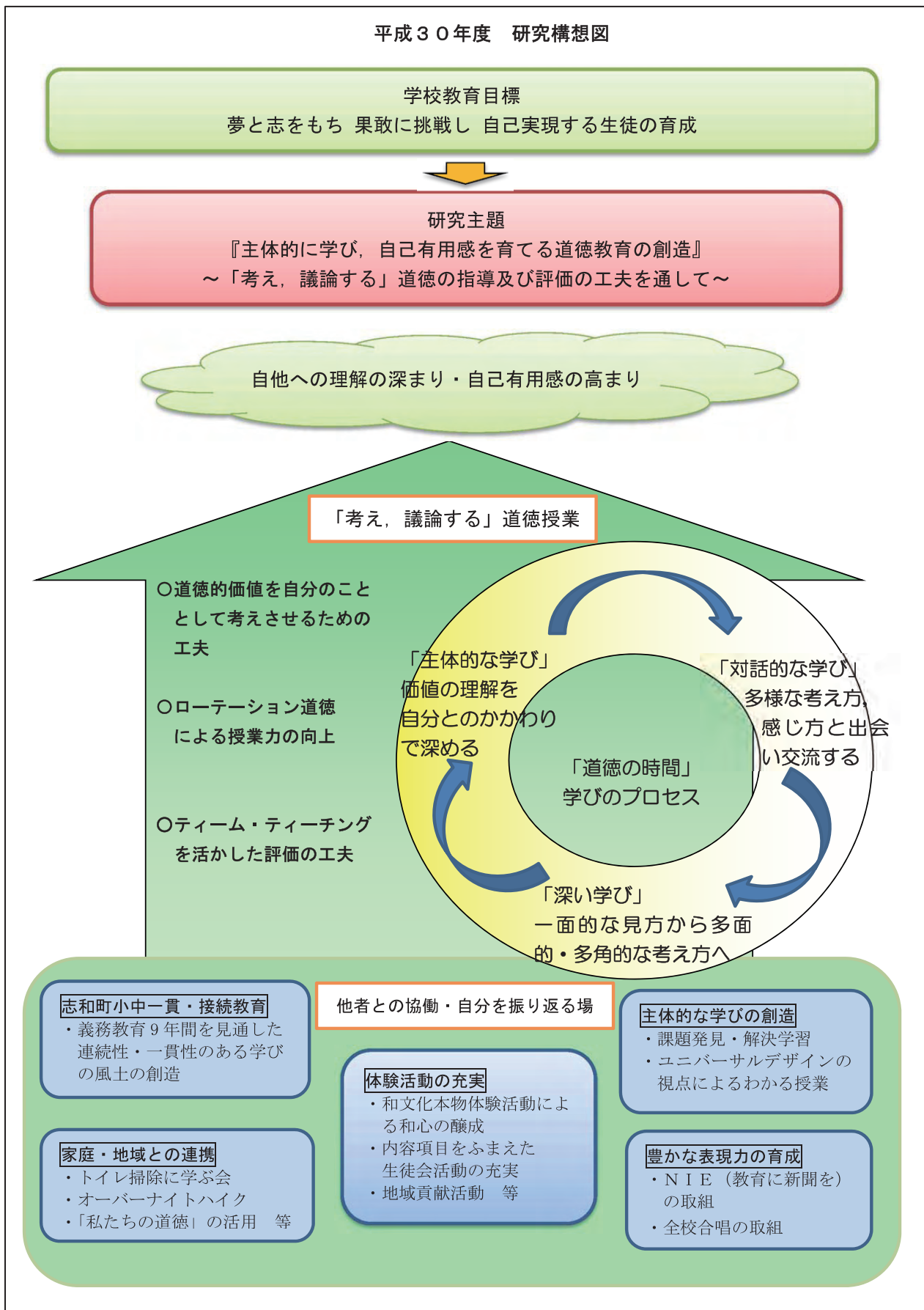
平成 30 年 1 1 月 2 2 日

東広島市立志和中学校

校長 森岡 勝司

1 研究の概要

(1) 研究構想図



(2) 研究主題設定の理由

本校は、東広島市の北西部の自然豊かな地域に立地する全校生徒 136 名の小規模校である（1・2 学年各一学級，3 学年二学級，特別支援学級二学級）。学校目標「夢と志をもち 果敢に挑戦し 自己実現する生徒の育成」を掲げ，特に平成 22 年度からは，「伝統と文化を尊重し，郷土を愛する子どもの育成」をめざし，地域教材の開発や地域貢献活動等の取組を行ってきた。

平成 28 年度は，文部科学省委託の「道徳教育改善・充実」総合対策事業の研究指定校として道徳教育の充実を図った。とりわけ，ローテーション道徳を導入することにより，授業力の向上と多面的・多角的評価による生徒の道徳性の育成を目指した。平成 29 年度は，年 3 回のローテーション担任週間の導入や，継続的にティーム・ティーチングによる道徳の時間の授業を実施することにより，より連携を密にした生徒理解の風土を構築し，平成 29 年度道徳教育パワーアップフォーラム（広島県教育委員会主催）で実践発表した。

平成 30 年度は，来年度からの「特別の教科 道徳」の全面実施に向け，新学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」を視点とした道徳の時間の授業を目指すこととした。具体的には，「考え，議論する」道徳の指導方法を工夫して，生徒が自分のこととして捉え，さまざまな考えに触れたり伝え合ったりすることで価値理解と生き方について考えを深める授業づくりをする。さらに，教科化に向けて取り組むべきことの一つである評価について，生徒の「主体的・対話的で深い学び」を視点にティーム・ティーチングにより見取り，個人内評価に迫ることで，授業改善につなげていくこととした。

本校の生徒実態として，数年来「自分には良いところがある」等の自己に対する肯定的な評価が低く，特に現 3 年生は，入学時の意識調査では 54%，2 年 3 月の意識調査では 66%と肯定的回答が低い課題を抱えている。そこで，要因の一つとして考えられる成功体験等の少なさや人間関係の希薄さを克服するための手立てとして，ユニバーサルデザインの視点を取り入れた「わかる授業」づくりや，生徒会活動の活性化に取り組んできたが，今年度は道徳の時間の授業を柱として，他者とのかかわりを通じた学び合いの中で，自己の生き方を考えさせていくことで，自信と誇りをもたせたいと考えた。

(3) 研究主題

『主体的に学び，自己有用感を育てる道徳教育の創造』
～「考え，議論する」道徳の指導及び評価の工夫を通して～

(4) 研究仮説

生徒が道徳的価値を深め，自分の生き方について考えを深める「道徳の時間」を要とする道徳教育を展開することができれば，生徒は自他への理解を深め，自己有用感を高めることができるだろう。

(5) 研究内容

「考え，議論する」道徳の授業づくり

- ① 道徳的価値を自分のこととして考えさせるための工夫
- ② ローテーション道徳の実践による指導方法の工夫と授業力の向上
- ③ 教科化における評価にむけての取組

(6) 検証の視点と検証方法

	検証の視点	検証の方法
生徒は、「道徳の時間」において、主体的に取り組み、「考え、議論する」ことにより自己の考えを深めているか。	『道徳の時間』の学習は好きだ。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
	『道徳の時間』では自分のことを振り返りながら考えている。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
	『道徳の時間』では友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
	『道徳の時間』に学習したことを、自分の生活に生かしている。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
生徒は、自己肯定感・自己有用感を高めているか。	「自分にはよいところがある。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
	「自分のよさが周りに認められていると思う。」と答える生徒の割合は増えたか。	生徒意識調査
授業者は、「道徳の時間」における指導と評価の一体化が図れたか。	「道徳の時間」を「深い学び」とするための指導方法の工夫、改善ができたか。	授業者授業記録
	「道徳の時間」の評価方法の工夫、改善ができたか。	評価文の作成・提示



(7) 研究経過

月 日	研修形態	研修内容	指導助言者
平成 29 年 4 月 4 日	校内研修	今年度の研究内容の確認	
6 月 9 日	授業研究	ねらいに迫る道徳授業	広島県立教育センター 金子京子 指導主事
7 月 6 日	校内研修	道徳科の評価にむけて ローテーション担任について	
8 月 22 日	理論研修	学級集団づくりについて	東広島市教育委員会 豊崎真理子 参事 鷹橋 忠文 指導主事 西村 尚子 指導主事
9 月 20 日	校内研修	ローテーション担任について	
11 月 8 日	校内研修	ユニバーサルデザインの授業づくり	
11 月 30 日	授業研究	自他を認め、自己有用感を高める道徳 授業	兵庫教育大学大学院 谷田 増幸 教授
平成 30 年 2 月 16 日	授業研究	自他を認め、自己有用感を高める道徳 授業	兵庫教育大学大学院 谷田 増幸 教授
4 月 4 日	校内研修	今年度の研究内容の確認	
5 月 1 日	示範授業 理論研修	「考え、議論する」道徳授業と評価 について	愛知県あま市立七宝小学校 鈴木 賢一 教諭
5 月 30 日	校内研修	評価文作成にむけて	
6 月 6 日	授業研究	「考え、議論する」道徳授業と評価 について	東広島市教育委員会 田川 至孝 指導主事
7 月 3 日	授業研究	「考え、議論する」道徳授業と評価 について	香川大学教職大学院 植田 和也 教授
7 月 11 日	校内研修	評価文検討	
8 月 2 日	校内研修	アンケート結果分析	
8 月 9 日	模擬授業 理論研修	模擬授業及び研究協議, 指導案検討	香川大学教職大学院 植田 和也 教授 東広島市教育委員会 田川 至孝 指導主事
9 月 13 日	校内研修	模擬授業及び研究協議, 指導案検討	

2 取組の実際 ～「考え、議論する」道徳の授業づくり～

(1) 道徳的価値を自分のこととして考えさせる工夫

① 「特別の教科 道徳」の目標とめざす授業とは

中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」には、道徳教育の目標及び「特別の教科 道徳」の目標として次のように示されている。

<学校教育全体で行う道徳教育の目標>

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とすること。

<特別の教科 道徳（道徳科）の目標>

道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

中央教育審議会答申（H28・12・21）では「何を学ぶか」という学習内容の在り方に加えて「どのように学ぶか」の重要性が述べられている。学習内容を深く理解し、新しい時代に必要となる 資質・能力の育成を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにするために「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が求められている。

「主体的な学び」

児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習。各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを結合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫することが求められる。

「対話的な学び」

子供同士の協働や教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。教材や体験などから考えたこと、感じたことを発表し合ったり、葛藤や衝突が生じる場面について、話し合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、議論したりするなどの工夫を行う。

「深い学び」

道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、さまざまな場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とすることが求められる。道徳的な問題を自分ごととして捉え、議論し、探求する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫する。

答えが一つではない道徳的な課題を、生徒一人一人が自分自身のこととして多面的・多角的に考え議論していく、「考え、議論する」道徳への質的転換が求められている。本校では、「考え、議論

する」道徳を「自分との関わりで主体的に考え、多様な考え方や感じ方と出会い、交流することで自分の考え方や感じ方をより明確にする」学びと捉えることとし、平成 28・29 年度は②で示す表のような展開で授業づくりを進めた。

② 平成 28・29 年度の取組

一時間の授業の流れ

本時のねらい	(中心発問等の本時の中心的な学習)を通して、(価値)を理解して〇〇しようとする〇〇を養う。	
	発問	留意点等
導入 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">5分以内</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 〇〇について知っていますか ○ 〇〇をやったことがありますか、その時どう思いましたか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに関連する発問をする ・心情円盤等を用いて意思を表明させる ・めあてを提示する場合はここで提示
展開 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; width: fit-content;">中心発問に 25 分までに入れるようにする</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; width: fit-content;">数人発表できるだけの時間的余裕をもって終末に入る</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を範読する ○発問 1 (内容を確認する問い) ○発問 2 ・ワークシートに自分の考えを記入して発表 (中心発問の前段となる問い) ◎中心発問 <個人思考> ・ワークシートに自分の考えを書く <グループ活動> ・班机にして 4 人班で話し合いをする ・全員が司会・記録・発表・盛り上げ等の役割を担う ・グループ内では全員が意見を出す ・A3 用紙にペンで書いて黒板に掲示 <全体での共有> ・班机を戻して発表する <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px; color: red;"> 多様な観点からの意見を知り、比べ合い、違いの意味を確認したり、議論したりすることでねらいとする価値についての考えを深める。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・問い返しの発問や道徳的価値に迫る補助発問に答えることで考えを深める ○教材から離れて価値に関する自分の生き方等にふれる発問 	<ul style="list-style-type: none"> ・範読しながら確認していく方法もある ・ワークシートに自分の考えを書く時間を保障する ・話し合いの材料としてワークシートに書く時間を保障する ・役割は毎回かえてどの役割もできるようにする (難しい生徒がいる場合は柔軟に対応する) ・それぞれの役割は「話し合いの手順」カードにあるので参考にさせる ・共通する語句を出すのか、キーワードを考えるのか、箇条書きの文章にするのか的確な指示を出す ・その文章にした理由を班員が説明できるところまで話し合わせる ・班の話し合いの内容を把握して意図的指名ができるような情報を集めておく ・深めたいキーワード等に赤線を入れたり、そう書いた理由を問い返したりする <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px; color: red;"> 生徒同士で意見の付け足しや対比についての交流ができるのがのぞましい。 </div>
終末	<ul style="list-style-type: none"> ○本時のまとめをして意見を交流しよう ・自己評価カードに本時のまとめを書く 	(めあてを提示した場合は、再度めあてに対する自分の思いを整理する時間とする)

授業づくりのポイントを、次の 3 点とした。

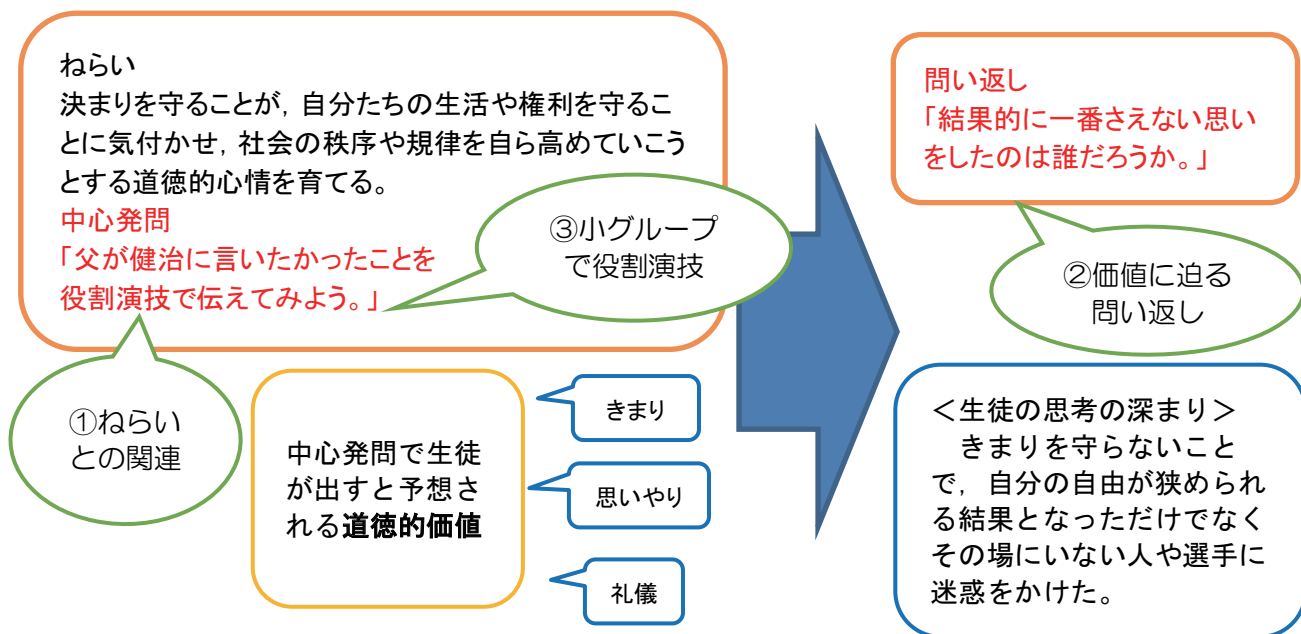
- ①内容項目とねらいや中心発問が一貫したものになっているか
 - ②中心発問の後に、価値に迫る問い返しの発問をしているか
 - ③小グループを有効に活用しているか



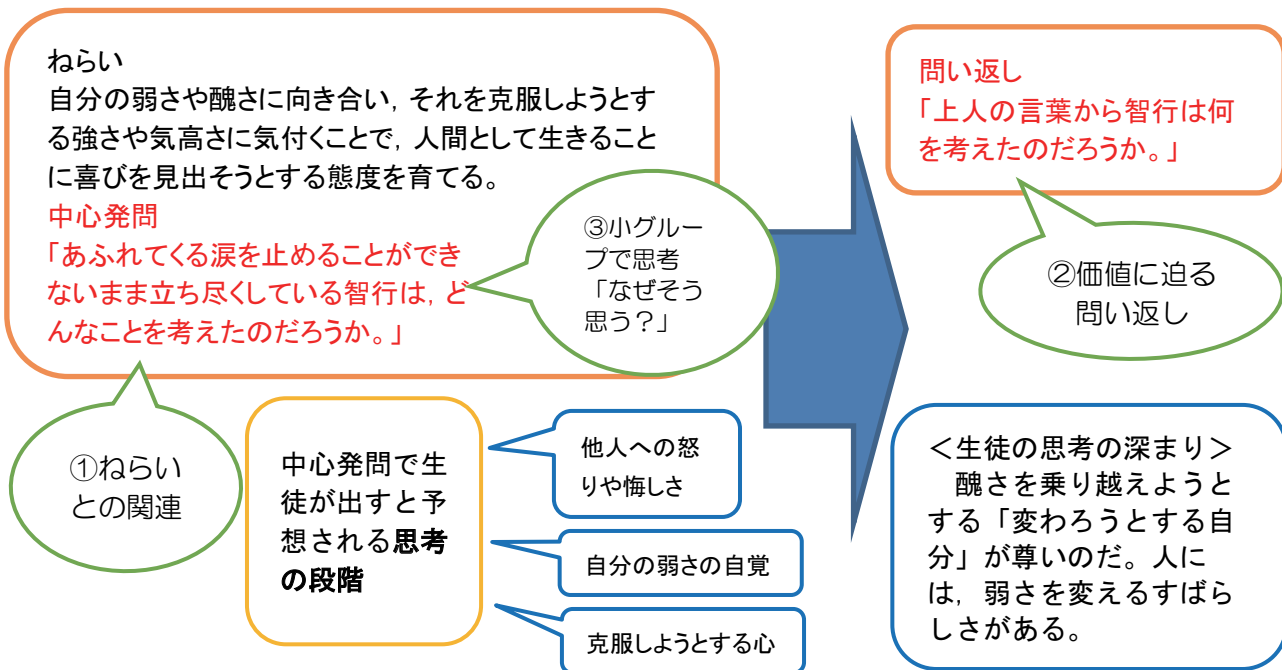
具体的な授業の中でのポイントを実践例にて示すと次の通りである。

実践例1 C(10) 遵法精神, 公德心 「ワールドカップ」

(出典『心の元気Ⅱ』広島県教育委員会)



実践例2 D(22) よりよく生きる喜び 「二人の弟子」 (出典『私たちの道徳』文部科学省)



11月と2月には、兵庫教育大学大学院教授谷田増幸先生を迎え、様々な学習形態のメリット・デメリットを整理したうえでアクティブ・ラーニングの充実を図ることや、全ての生徒にとって「新たな学び」となるような補助発問を吟味することについて研修した。

③ 平成 30 年度の取組

二年間にわたる校内共通の展開を実践することで、「自分ごととして考える」展開はできたが、グループ活動のマンネリ化が起きてきた。個々の生徒に毎回違う役割をもたせたり、話し合いの手順表などを使ったが、話し合いそのものが形式化してしまうこともあり、3～4人という少人数で考えを深めていくことが難しい場合もあった。そこで5月に愛知県あま市立七宝小学校鈴木賢一先生を迎え、「深まりのある道徳授業」の師範授業を参観した。グループ活動という手法にはこだわらず、「深まり」を「個人が考えの根拠をもち意見を交流すること」、「新たな気づきがある」状態と捉えて行った実践例を示す。

実践例3 A(4)希望と勇気, 克己と強い意志「風に立つライオン」
(出典:「中学生の道徳3」廣濟堂あかつき)

ねらい

主人公を支えたものが何であるか考えることを通じて、理想の実現を目指して自分の人生を切り拓いていくことが充実した生き方につながることに気づき、生涯をかけてそのことを実践していこうとする意欲を養う。

中心発問

「風に立つライオンでありたい」とはどのような生き方をしたいということだろうか。

問い返し

「よどみのない生命を生きたい」とはどんな生き方なのだろうか。

<生徒の思考の深まり>

自分の信念に対して、ひたむきに行動することで悔いのない人生を生きたい。

全員起立した状態で自分の意見と比べながら人の意見を聞く。
→聞き手を育てると同時に思考を深める。

教師の問い

まず自分の考えをもって人の意見を聞こう。自分と同じ意見が出たら座っていこう。

友達の意見に付け足しや質問はないだろうか。

人の意見を聞いて、自分はどの意見に一番共感できるだろうか。その理由は何だろうか。

自分の考えを深めるのに参考になったのは誰のどんな意見だろうか。

生徒の思考の深まり

比較することで自分の意見もより明確になる。

同じ意見でも理由は違うことに気付く。

自分の意見の理由を説明するのと比べて、一段思考を深めた状態での理由となる。

友達の意見が自分の思考の参考になった。

<生徒の振り返り>

今日の授業では、何に対してもあきらめないことや、自分の弱さに負けないということを大事にしようと思いました。今の自分は逃げているところがあると思います。人の支えがあっても、決めるのもやるのも自分だから、強い気持ちを持っていたいと思います。



小グループ活動を取り入れると、「まとめること」（合意形成）が話し合いの目的になりがちであるが、道徳の時間の話し合いは道徳的価値の理解を深める手段である。平成 28 年度からご指導いただいている香川大学教職大学院教授植田和也先生を迎え、「違いを出し合う」ことで思考を深めていくことをねらった実践例を示す。

実践例 4 C(10) 遵法精神、公德心「島耕作 ある朝の出来事」

(出典：「中学生の道徳 1」 廣済堂あかつき)

ねらい

島の「困っている人を助きたい」という思いがどうすれば正しく伝わったのか考えることを通して、社会の一員として公共の場における望ましい態度のあり方について気付き、気持ちのよい社会を実現しようとする実践意欲を養う。

中心発問

「島の思いを正しく生かすにはどのようなことを大切にすれば良いのだろうか、アドバイスしてみよう。」

問い返し

みんなにとって『電車の中』にあたる場所はどこだろうか。

<生徒の思考の深まり>

自分は満員電車に乗ることは少ないけれど、学校も「色々な状況」のある人がいる公共の場だ。

中心発問の前に役割演技をして様々な立場から気付きを発表させる。

→ 自我関与させたり考えの根拠を聞くことにより思考を深める。

生徒の発言

サラリーマンの言い分は演じながら腹が立ってきた。

サラリーマンは自分のことばかり考えすぎだ。

サラリーマンの主張もわからないわけではない。

しんどい思いをしているサラリーマンだからこそおばあさんの辛さをわかってほしい。

生徒の思考の深まり

演じることで自我関与する。

役割演技を見ることで気付くことは、人により違う。

「正しい」とわかっていてもできない弱さは自分にもある。

意見を出し合う中で、人間理解が深まる。

<生徒の振り返り>

始めはおばあちゃんの事を思いやっただけでよかったけれど、それでは周りのことが抜けていました。私にとっての公共の場は学校だと思います。例えば図書室で、私は先輩と楽しく話をして過ごしているけれど、試験にむけて勉強をしている 3 年生にとって、これは迷惑かもしれないと振り返ることができました。



(2) ローテーション道徳の実践による指導方法の工夫と授業力の向上

① 「ローテーション道徳」とは

中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」では、指導の配慮事項として次のように示されている。

学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実すること。

協力的な指導などについての工夫について、道徳科の指導体制を充実するための方策としては、全てを学級担任任せにするのではなく、特に効果的と考えられる場合は、道徳科における実際の指導において他の教師などの協力を得ることが考えられる。

また道徳科における具体的な評価のための工夫として次のようにある。

年に数回、教師が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった取組も効果的である。このことは、教師が自分の専門教科など、得意分野に引きつけて道徳科の授業を展開することができる。また、何度も同じ教材で授業を行うことにより指導力の向上につながるという指導面からの利点とともに、学級担任が自分の学級の授業を参観することが可能となり、普段の授業とは違う角度から生徒の新たな一面を発見することができるなど、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子をより多面的・多角的に把握することができるといった評価の改善の観点からも有効であると考えられる。

従来、教員にとって道徳の授業は、一つの資料で一度しか実施できないため、反省はするものの授業改善にまで至らないことが多くあった。一人の教員が同じ資料で複数回の授業を実施することで、じっくりと時間をかけた授業準備や、授業改善を図るマネジメントサイクルが可能となる。授業力の向上により生徒の道徳性を高めることを目的として、本校では各学級の道徳授業を、様々な教員がティーム・ティーチング（以下T・T）でローテーションしながら実施するローテーション道徳を実施した。

② 平成 28 年度を取組

平成 28 年度、本校では特別支援学級担任 2 名を除く 9 名の教諭がローテーションを組み、道徳教育推進教師との T・T 指導により、全学級（2 学級×3 学年）の授業を実施した。これは、本校が小規模校であり大半の教員が複数学年の教科授業を担当している等、日頃から所属学年以外の生徒の個々の状況も把握できており、学年単位ではない、全教員でのローテーションが可能であると判断したためである。

また、発達段階の違いを考えて、授業展開や中心発問等は学年ごとに変える工夫をしながら実施することにした。学年ごとの別葉を参考に、他の教科や教育活動との関連も確認することで、発達段階に応じた内容項目のねらいを吟味した。以下にその一例を示す。

(ア) 発達段階に応じた中心発問例

A(2) 節度、節制『別にメーカーかけてないし』（出典「心つないで」1年 教育出版）

学年	中心発問
1 学年	「娘の行為は迷惑をかけていないのか。」
2 学年	「迷惑をかけなければ問題はないのか。」
3 学年	「娘たちの問題の根源には何があるのか。」

また、ローテーションを展開する途中に授業反省を繰り返し、中心発問の修正や補助発問の工夫を行った。以下にその一例を示す。

(イ) 中心発問を修正した例

D (20) 自然愛護 『海ガメの涙』(出典「心つないで」2年 教育出版)	
学年	中心発問
2 学年	「明は心の中でどんなことを思ったのか。」
↓	主題について、より具体性をもった価値理解をさせる為に自分の生活経験と重ね合わせる発問に修正。
1 学年	「人間にとって自然はどんな存在なのか。」
↓	班での話し合いでは、まだ具体性に欠ける抽象的な表現にとどまった為、全員の言葉をウェビングマップでつなげることにした。
3 学年	「人間にとって自然とはどんな存在なのか、つながりを黒板にウェビングマップにして考えてみよう。」

(ウ) 補助発問を修正した例

C (13) 勤労 『真の味ひとつ』(出典「明日を生きる3」 東京書籍)	
学年	価値を焦点化させる補助発問
1 学年	「一味真とはどんな意味だろうか。」
↓	夫の書いた「一味真」の言葉の意味よりも、おばちゃんの思いを考える方が、より仕事のやりがいについて迫ることができると考え修正。
3 学年	「おばちゃんは仕事のやりがいをどのように考えているだろうか。□□の上 に利益がある、の□□に入る言葉とは。」

また、理科教員が自然愛護、海外赴任を経験した教員が国際理解の内容項目を担当する等、担当教科の特性や教員の得意分野を生かした指導も可能となった。ICTを活用した資料提示や、手描きイラストの作成、導入で使う音源の録音等、教職員が協力しながら授業準備をすることで、様々な工夫を試みることが容易になった。

さらに授業を常に公開することで、授業を通じた互いの研修の場とすることができた。毎週異なる授業者が入るため、多面的・多角的な生徒理解も可能となった。

	メリット	デメリット
生徒	①様々な授業者がクラスに入ることによって毎回の授業が新鮮になり、楽しみになる。 ②積極的に授業に取り組み、思考を深めることができる。 → 深い学び	①授業者が毎回変わることによって、自分の思いや考えを伝えることを不安に思う。
授業者	①教科の特性や得意分野を生かした授業の工夫ができる。 ②教材研究にかける時間が増え、自信をもって授業に臨むことができる。 ③見出された反省や課題をすぐに次の授業に生かすことができる。 ④複数の授業者による多面的・多角的な生徒理解ができる。 ⑤他教員の授業の参観がしやすい。→ 指導力の向上	①授業者によっては、担当しない内容項目が生じる。 ②配慮を要する生徒に対する関わり方や、年間を通した生徒の変容の把握について、担任と綿密な連携が必要。

③ 平成 29 年度の取組

平成 29 年度は、T2 を学級担任又は同じ学年の教員が担当する T・T によるローテーション道徳を取り入れた。これは、学年の教員が常に授業者となることにより、生徒の「自分の思いを伝えること」に継続した指導ができること、学級担任が、「より客観的に自分のクラスの生徒の様子を観察できる」というメリットを評価に生かす工夫が必要であるという前年度の反省を踏まえてのことである。これによって、T2 の役割も個々の生徒の様子を見取っていくことに重点を置くこととした。T1 については、内容項目や時期によって担任が実施するものを決め、その他のものを全教員で専門性などを考慮しながら分担して実施した。

担任がT1として実施したもの

- ・学期の始め・終わりの教材は担任がT1となる
- ・重点項目（複数回実施する項目）については一回は担任がT1となる
- ・生命尊重については担任がT1となる

また、「多様な意見を受け止め、認め合える学級の雰囲気」が道徳授業の基盤となることから、学級集団づくりを見直すために、8月には学級経営研修を実施した。

一方で、生徒の多面的・多角的な理解を進めるために、全3回のローテーション担任ウィークを設けた。給食や帰りのHRを学級担任だけではなく、他学年所属の教員も積極的に関わることで、生徒を評価する機会を増やし、自己有用感を高めることを目的とした。また、他学年から求めたい先輩像・後輩像を伝えることにより、今後の成長の姿のイメージを持たせ、これからの生活においてのさらなる意欲を喚起した。

日程等の詳細は以下の通りである。（数字は所属学年）

		1-1	2-1	2-2	3-1	3-2
第1期	担任	湯場③	藤原③	山垣内②	小野②	橘和①
7/10~14	副担任	黒河①	佐藤②	毛利②	池田③	
第2期	担任	山垣内②	湯場③	藤原③	佐藤②	小野②
9/25~29	副担任	橘和①	黒河①	毛利②	池田③	
第3期	担任	藤原③	池田③	黒河①	山垣内②	毛利②
11/6~10	副担任	橘和①	小野②	佐藤②	湯場③	

- ・朝のHRは通常の学級担任が行う。給食、掃除、帰りのHRはローテーション担任とする。
- ・ローテーション担任ウィークは、毎日、学級日誌を作成する。日誌には、担当クラスの生徒についての気づき（良い点や改善点）クラスの様子や教室の学習環境等を簡単に記述する。
- ・ローテーション担任ウィーク最終日に、教職員の情報交流会を持つ。

ローテーション担任をすることで、

- 日頃見られない生徒の一面（授業ではおとなしい生徒が明るく会話をする姿など）を見ることができた。
- 他の学年学級の状態を知ることができ、人間関係づくりに役立った。
- 他学年、学級の様子を見て、自分のクラスを振り返ることができた。
- 他学年の生徒への指導を、ためらうことなくできる。
- 副担任として、自分の学級の生徒の様子を客観的に見ることができた。個別に対応が必要な生徒に時間を使うことができた。

という感想があった一方、学級担任が前もって課題を明らかにしておく必要があり、特に突発的なトラブルが起きた時の具体的な対応について、日頃からの情報共有がまだ不足しているということが明らかになった。

④ 平成 30 年度の取組

本年度は、学年内（学級担任と副担任）で教員がT・Tを組み、道徳の授業を実施している。教科化に向けて、個々の教員が内容項目を理解し、さらに生徒の学習の状況を把握して評価につなげる見取りについて実践していくことを目的とした。具体的には（3）③で述べる。



（3）教科化にむけた評価についての取組

① 評価の方向性について

平成 31 年度からの中学校での教科化に伴い、評価も始まる。「道徳科」の評価は道徳性そのものの評価ではなく、道徳科の授業における生徒の「学習状況」や「道徳性に係る成長の様子」の把握を示しており、方向性については中教審答申等で次のように整理されている。

<「道徳科」の評価の方向性>

- ・ 数値による評価ではなく、記述式とする
- ・ 個々の内容項目ごとではなく、大きくりなまとまりを踏まえた評価とする
- ・ 他の生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行う
- ・ 学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視する

評価を記述する着眼点としては次のような例が示されている。

- （ア）主に具体的な生徒の学習状況をとらえた評価
- （イ）主に多面的・多角的な見方への発展をとらえた評価
- （ウ）主に自分自身との関わりで価値の深まりに関する評価
- （エ）道徳性に係る成長の様子をとらえた全体的な評価

評価は生徒が、自身の学びを実感し、意欲の向上につなげていくものであると同時に、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の工夫・改善に結びつく資料となるものである。つまり、指導と評価の一体化が図られなくてはならない。本校では、生徒の学びの蓄積としてワークシートや自己評価カードの活用することにした。また、ティーム・ティーチングを活用して、授業の様子を見取っていくこととした。

② 平成 29 年度の取組

以前より、一時間の授業の終末では、振り返りとして授業で学んだことや生活を振り返って感じたことについて自分の言葉で整理する時間をとっていたが、平成 29 年度は、積極的に文章を発表させたり、通信で紹介するなどして個々の学びを肯定的に評価した。さらに、「道徳科における評価の方向性」を受け、生徒の学習状況や道徳性に関わる成長の様子についての評価をどのようにしていくか考えるために、一時間の授業の中でどう評価するかという視点で、毎時間のワークシートを使用して、文章による評価を考える校内研修を行った。研修で作成した評価文について以下に示す。

生徒の記述：今日は色々な考えに触れることができた。三人は、自分に正直に、失敗に気付いたらそれを正すための努力をすることが責任の取り方だと思う。僕にとっての「誠実な生き方」は、やったことに対して相手のせいにせずに自分の結果として責任をとることかなと思った。



見取りの視点

- ・一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
- ・道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

作成した評価文

○「リクエスト」では、自分の行為に責任を持つことの大切さについて考え、誠実な生き方についてしっかり考えることができた。
 ○課題を自分ごととしてとらえ考えている様子がみられた。特に「リクエスト」では誠実な生き方について自分の考えを持ち、友達との議論を重ねることでさらに深い考えをもつことができた。

作成しての気づき・今後に向けての課題

具体的な学習状況が特によくわかる記述にはふせんを貼っておくとよいのでは。

長い文章を書くことやプリントを整理しておくことが苦手な生徒は、教員による観察も極めて重要なのでは。

授業のねらいを評価者として吟味していないと適切な評価ができないのでは。

「道徳性に係る成長の様子をとらえた全体的な評価」にむけては、ワークシートとは別に毎時間授業の最後に「道徳の記録」として自己評価カードを記入した。

道徳1年間の記録 年 組 番()

日付	曜日	タイトル	考えたこと	自己評価①	自己評価②
月 日				A B C D	A B C D
月 日				A B C D	A B C D

自己評価①

自分と違う意見を理解し、色々な考え方があることを知り、幅広く考えることができたか。

自己評価②

資料のことがらについて、自分のことに置きかえて考えることができたか。

使用しての気づき・今後に向けての課題

毎回回収するので紛失しない。記入が短時間で簡単にできる。

視点があいまいだと毎回同じ自己評価になる。

内容項目は毎回変わるので、文面から変容はわかりにくい。

学級担任や同じ学年の教員がT2として入ることで、より客観的に生徒の見取りができる可能が増えた。しかし、グループ活動等の支援に入ると記録を残す時間的余裕がなく、また、教員による記録がより必要となる「発言やワークシートの記入が少ない生徒」の記録ができないという課題が生まれた。

③ 平成30年度の取組

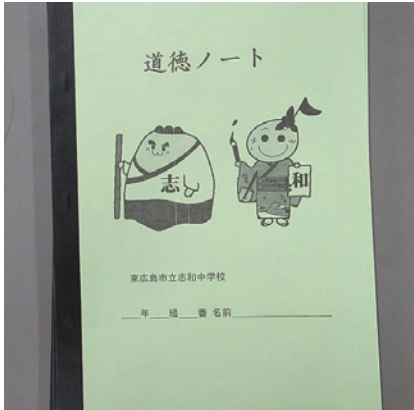
平成30年度は、実際に全員の評価文を作成、本人と保護者に趣旨の説明とともに提示することにした。生徒自身の授業ノートの蓄積と授業者の見取りの記録として次の二点を改善した。

- ・ 道徳ノートへの記入と自己評価
- ・ 授業者による授業記録用紙への記入

(ア) 道徳ノートへの記入と一定期間での自己評価

昨年度まで、道徳の時間には、生徒はワークシートを使いファイルに綴じていたが、点検のための回収と返却を繰り返していくうちに、ファイリングできない生徒も若干名いた。確実に記録を残すために今年度は共通のワークシートを1年分綴じた「道徳ノート」を作成している。授業の終末で記入する欄には、書く視点として次の3つを提示して「何となく感想を書いて終わる」ことのないように意識させた。

- 今日の学習を振り返って
- ① 新たな発見をしたり考えを深めたりしたこと
 - ② 自分の姿と重ね合わせて考えたこと
 - ③ これからの生活に生かしていきたいこと
- などについて書いてみましょう。



今日は、道徳のカーテンの白いうで。最初は何なんの話と思
 っていたら、主人公が憧れを抱きはじめイカサマヤブ
 のことが憎くなっていたので主人公もいろいろな思いがあ
 るなと思いました。最後ヤブがいてしまったあとにようやく
 カーテンを見ると冷たいレンガと出て来たのでビックリし
 ました。その事新伝えるが、隠すか？ 皆の意見が分かれた
 時 人の考えは ちがうからおもしろいなと思いました。
 貴重な発見が 考えが聞けたので 道徳は好きだと 覚悟して守りました。

自分の考えだけでなく、授業で知った多様な考えを道徳ノートに書き加えることで、自分の考えを深めていくことができ、また自分自身の成長や課題をみつけ自己を振り返る材料ともなる。授業者にとっては、発言としては出なかった考えや良さを見つけたり、成長の様子を継続的に見取ったりしながら、生徒の学びの深まりを評価に反映させることと同時に授業改善に向けての参考となっている。

また、「深まりのある学びの大きかった授業」等を振り返らせるために、4～7月の授業について振り返りシートに記入させ自己評価させた。

- 今までの学習を振り返って
- ・ 最も印象に残った授業を3つとその理由
 - ・ 道徳の時間全体を通して学んだことや考えたこと、自分が成長したこと
- などについて書いてみましょう。

ここでも、「積極的に学べたか」「新たな発見をしたり考えを深めたりすることができたか」「これからの生き方について考えたか」等の振り返りの視点を明示することで、道徳の授業での目標にそった自己評価になるようにした。

(イ) 授業者による授業記録用紙への記入

T2は、見取り以外にも板書や話し合いの支援・問い返しなど行うことが多くあるので詳細な記録を毎回取ることは現実的ではない。そこで、生徒数人の様子について観察したことを記録として残すこととした。授業の内容項目や教材名に加え、主な発問やどんな場面（個人思考・ペア・グループ・全体など）での様子かを記入欄を工夫して記入しやすくすると

主な発問		気づき			
1 「目標は小刻みに」自分は今まで意識しようとしてきたことなので、自分と重ねることができた。今、部活動で小さな目標を立ててがんばっているから印象に残っている。		気づき： 1 他者の考えに触れながら思考している 2 多面的・多角的に思考している・新しい発見をしている 3 自分との関わりの中で価値理解を深めている 4 意欲的に活動する様子 5 その他			
番号	名前	場面	コメント		
1		個人思考	2 ペア	/	授業内容の振り返り、自分と重ねることができている
2		グループ	4 全体		
5		最後の個人思考			
1		個人思考	2 ペア	/	人の意見を聞いて、自分の考えを整理することができた。
3		グループ	4 全体		
5		最後の個人思考			
1		個人思考	2 ペア	/	人の意見を聞いて、「理由が別にあるのに」と自分の考えを整理できた。
3		グループ	4 全体		
5		最後の個人思考			

ともに、簡単に記録できるように略記号を示すなどの改善をした。授業後に、生徒の「道徳ノート」を読んでの気づきも加えていくと、「記入・反応」ともに乏しい声かけの必要な生徒も明らかになり、授業後に個別に感想等を聞いてみるなどの手立てが必要であることを共通認識することができた。

(ウ) 評価文の作成

7月の三者懇談で評価の目的を説明して評価文を提示するために、4～7月に実施した授業の学習状況を対象として評価文を各学年部で作成した。①で示した評価の方向性に従って、まず(ア)で示した「道徳の振り返りシート」を基に、その生徒にとって心に響いた、または生徒が活躍した授業を焦点化した。次に、道徳ノートからその時の授業記録を読み直し、振り返りシートと道徳ノートからその生徒が特に学んだことや新たに気づいたこと等について自分なりの言葉で表現している部分に注目して、評価文を作成した。その際、(イ)で示した、授業者の「授業記録用紙」のメモも参考にするので、生徒自身が気づいていない成長を認め、励ます評価文とすることに留意した。

評価文の作成例 2

① <自己評価表の記述・・・一番印象に残った授業とその理由>

「目標は小刻みに」自分が今まで意識しようとしてきたことなので、自分と重ねることができた。今、部活動で小さな目標を立ててがんばっているから印象に残っている。

自己を振り返り、生徒が自身の良い点や成長に気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲が高まる。

② <①に該当する授業の道徳ノートの記述>

「目標は小刻みに」今の自分は、初めはやる気があるので時間がたつとなくなってしまうので、やる気を継続させたい。小さな目標を立てて少しずつ大きな目標に近づいていきたい。後で後悔することがないようにしたい。

記述自体の評価ではなく、道徳的価値理解を深めようとしているか、自分との関わりで考えたかななどの成長の様子を見取る。

③ <授業者の見取り・・・授業記録用紙>

- ・小グループでは自分の考えを言っている。
- ・全体では指名された時に自分の考えを発表できる。

<評価文を読んだ本人の感想>

いつもは自分の生活の中だけで考えているので、他の人や資料の中の行動からも考えていきたい。

<作成した評価文>

部活動の体験をもとに、小さな目標を立てて努力することの重要性について再度考えを深めることができた。授業で学習した内容を自身の生活と照らし合わせ、客観的に振り返って今後の生活に繋げることができた。

① <自己評価表の記述・・・一番印象に残った授業とその理由>
 「風に立つライオン」自分ならどうするだろうかという視点で考え続けることができた。普段何気なくしている行動について、改めてその意味を考えることができたと思う。

自己を振り返り、生徒が自身の良い点や成長に気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲が高まる。

②<①に該当する授業の道徳ノートの記述>
 「風に立つライオン」夢や理想の実現を目指して生きるとは、「自分なりに生きる」ことだと思う。そうして生きていけば、結果がどうであれ、悔いることなくこの生き方でよかったと思えると感じた。

記述自体の評価ではなく、道徳的価値理解を深めようとしているか、自分との関わりで考えたかなどの成長の様子を見取る。

③<授業者の見取り・・・授業記録>
 ・自分の意見を持ったうえで人の意見と聞き比べた発言が多い。
 ・文章に書くことより、話すことの方が得意な様子。

<評価文を読んだ本人の感想>
 これを読んで、「次もがんばろう」という気持ちになれた。

<作成した評価文>

授業では、仲間の意見をよく聞き、積極的に自分の意見を述べる姿がよく見られます。特に『風に立つライオン』では、夢や理想の実現に向けて過酷な状況でも頑張れたのは、主人公が結果よりも、自分らしく悔いなく生きることに関心を見出したから、と気づくことができました。〇〇君も過程を大切にしながら、自分らしく夢に向かって頑張ってください。

今回の短期間での変容の見取りは、「自分の意見が書けなかった生徒が書けるようになった」といった表出の変容が中心となったため、大きくくりな授業の様子と共に、授業中での「顕著な例」も含めた個人内評価として作成することとした。評価文の作成について事前に校内研修で共通理解を図り、作成後に評価文の読み合わせを行い修正をした。

また、評価をチーム（T・Tの記録を基に学年の教員で作成する）で行うことで、より妥当性・客観性を持たせるとともに、生徒が自分では気づいていない良さを認め励ますことを目指した。

生徒の書いた言葉に、記録を基に価値付けをした評価文

複数の教員から認めてもらえる

自分では気づかなかった良さを知らることができる

自分にはこんな良さがあったのか

さらなる成長へ

評価文を書くためには生徒の様子を記録に残すことはもとより、ねらいや中心発問等の授業記録そのものを整理していくことも重要となる。これらの授業記録と生徒の道徳ノートを見比べることにより、ねらい・指導の手立てといった授業そのものを授業者自身が評価し、授業改善に生かすことが必要である。つまり生徒の道徳性を養い得る質の高い授業をすることが土台であり、指導と評価の一体化を図る授業づくりが重要であることを確認することができた。

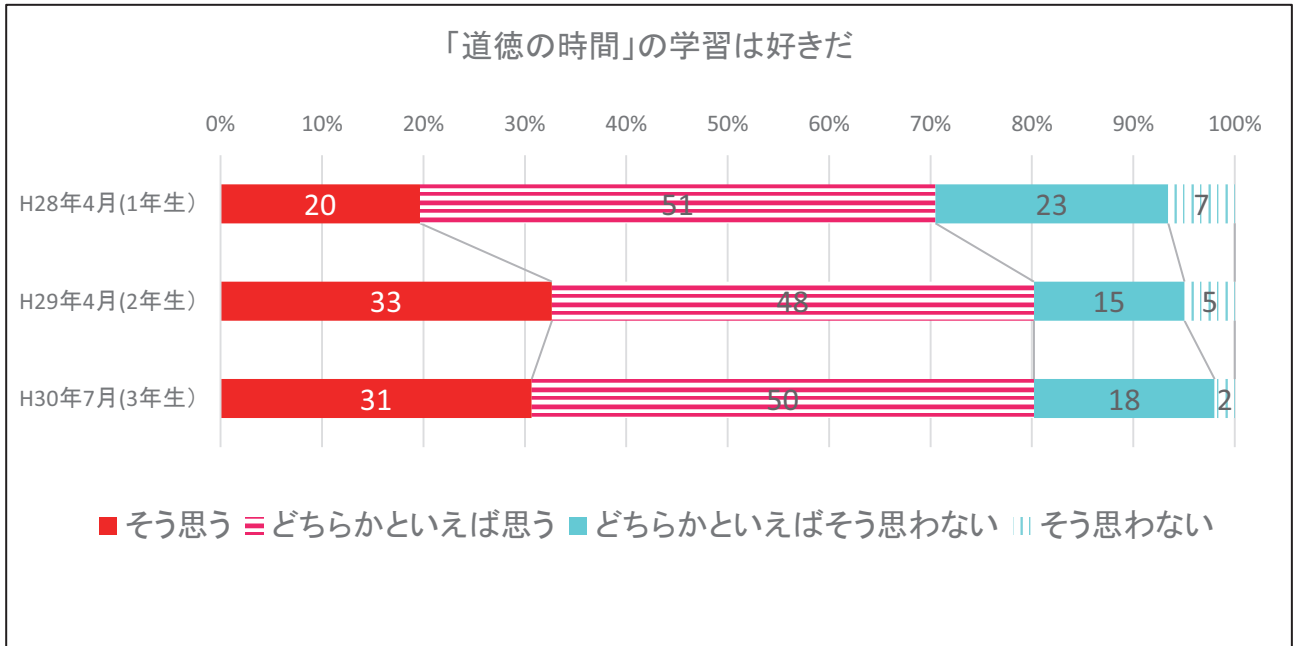
3 検証

生徒意識調査は、毎回全校生徒を対象に実施しているが、本稿では、特に現3年生の経年変化（平成28年度1年生・平成29年度2年生）についてグラフ化したものを掲載して検証する。

(1) 【検証の視点】生徒は、「道徳の時間」において、主体的に取り組み、「考え、議論する」ことにより自己の考えを深めているか。

① 「『道徳の時間』の学習は好きだ。」と答える生徒の割合は増えたか。

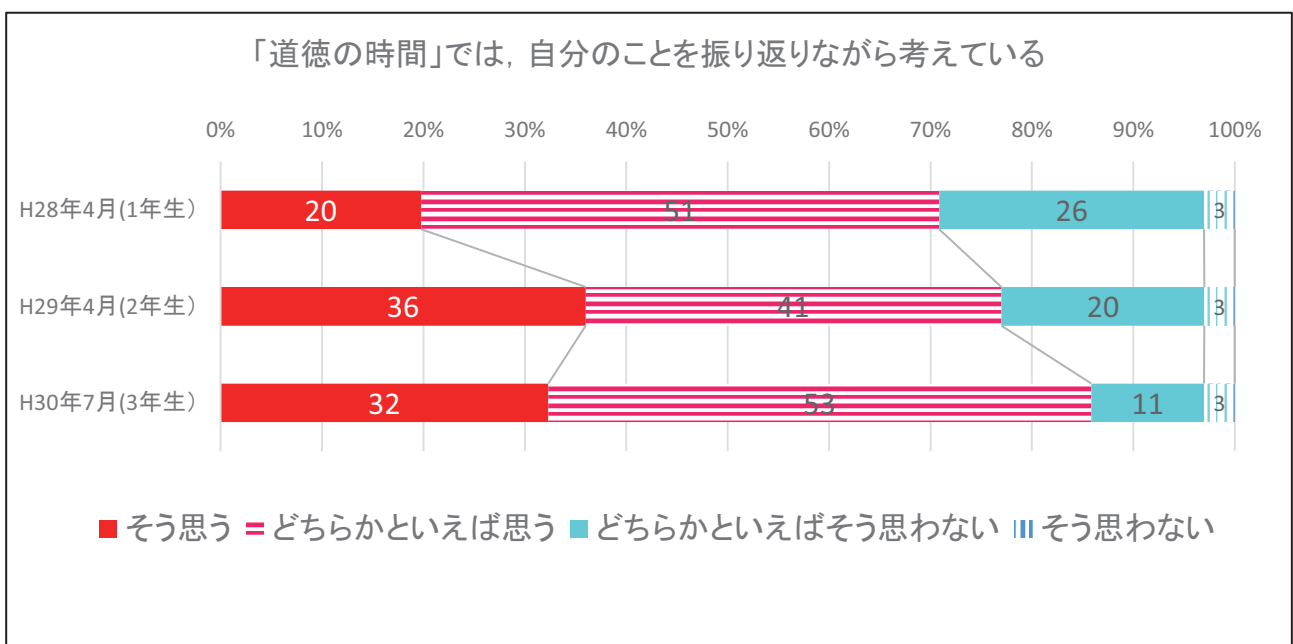
【検証方法】 生徒意識調査（平成28年度入学生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

② 「『道徳の時間』では自分のことを振り返りながら考えている。」と答える生徒の割合は増えたか。

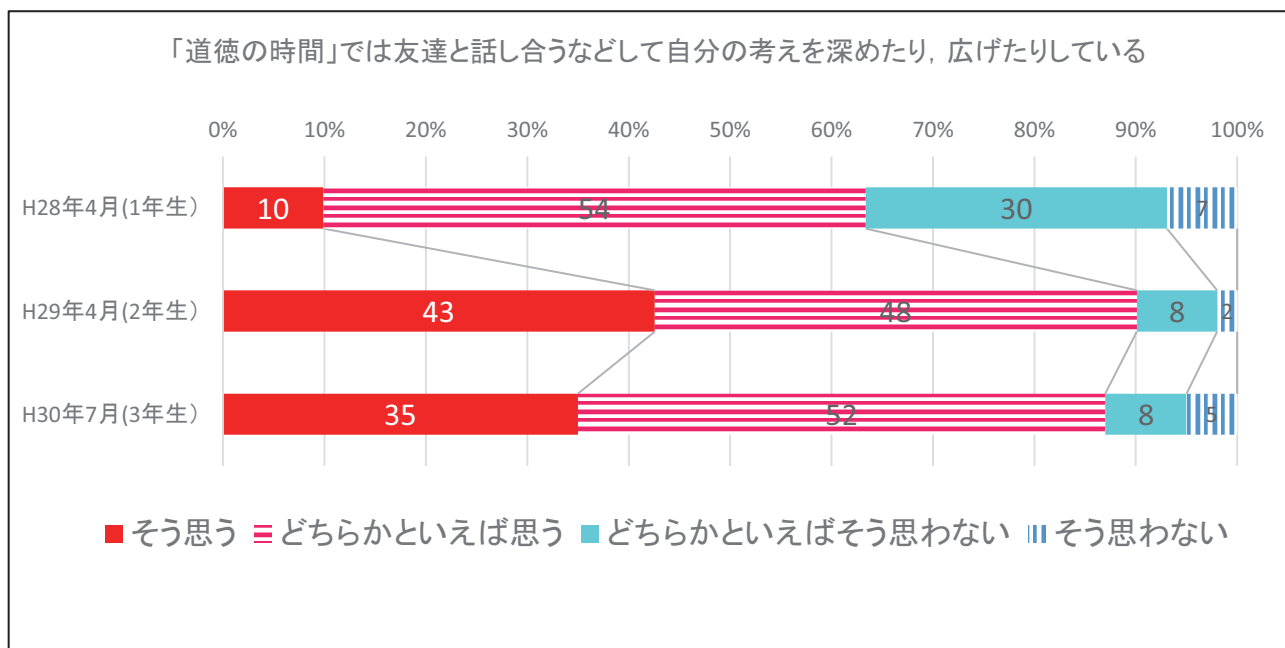
【検証方法】 生徒意識調査（平成28年度入学生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

- ③ 「『道徳の時間』では友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。」と答える生徒の割合は増えたか。

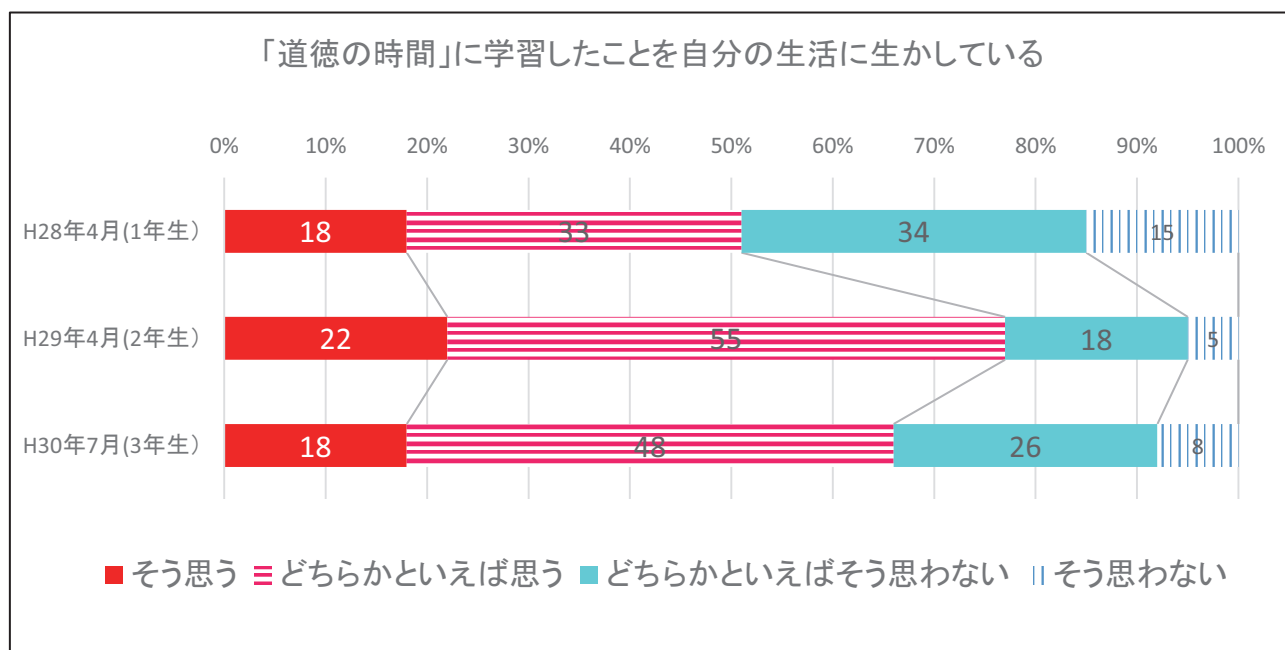
【検証方法】 生徒意識調査（平成28年度入学生生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

- ④ 「『道徳の時間』に学習したことを、自分の生活に生かしている。」と答える生徒の割合は増えたか。

【検証方法】 生徒意識調査（平成28年度入学生生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

【考察】

・「道徳の時間が好き」と肯定的回答している生徒が、一年次の70%から80%に増加しているが、20%の生徒は否定的回答を続けている。否定的回答をする生徒が、「今日の授業は良かった」と思える授業づくりが必要である。



・「道徳の時間には自分のことを振り返りながら書いている」に肯定的回答をしている生徒が一年次の71%から85%に増加している。自分ごととしてとらえたことについて、毎回の振り返りで文章記述しているが、既習の内容と関連させて書かせる等、内容をさらに深めたものにしていく必要がある。

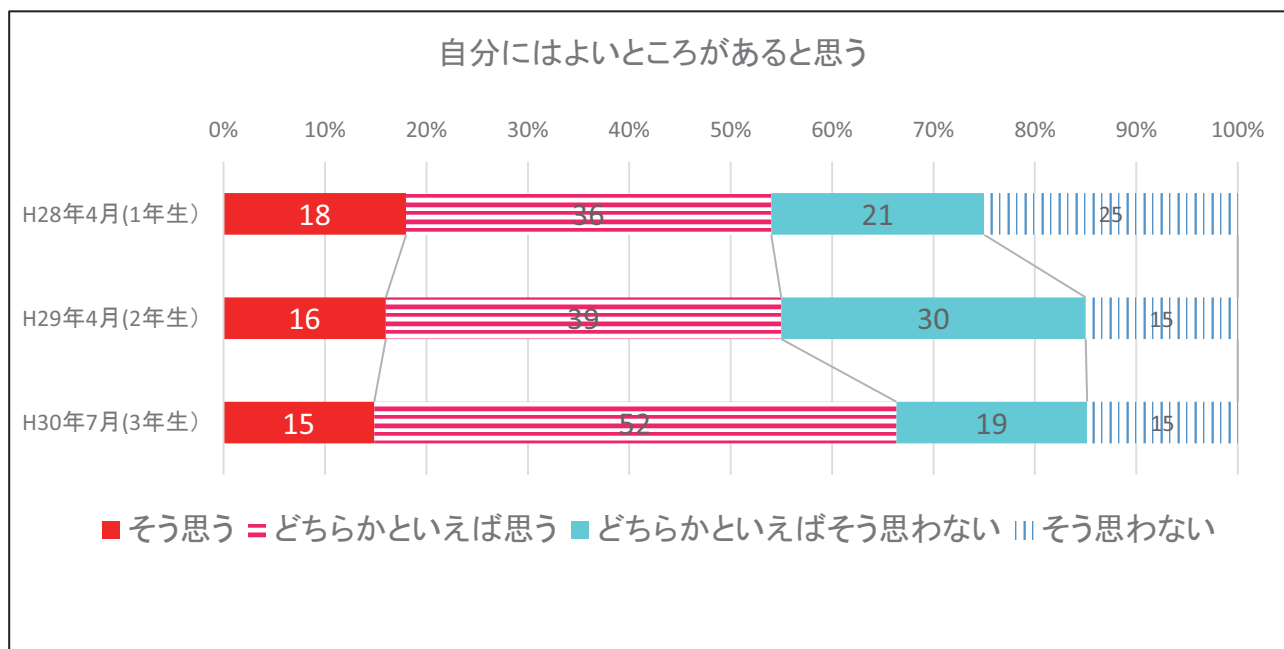
・「友達と話し合うなどして自分の考えを深めたり広げたりしている」に肯定的回答をしている生徒は一年次の64%から87%に増加している。二年次の91%より減っているのは、今年度話し合いの形態をグループ中心からクラス全体の意見交流中心に変えたことが要因の一つとして推測される。

・「道徳の時間に勉強したことを自分の生活に生かしている」に肯定的回答をしている生徒は一年次の51%から66%に増加しているが、二年次77%より減っており、多いとは言えない。三年生になり、実生活からやや離れた教材を使うことも増えているが、体験活動との関連など授業者が「道徳教育の要としての道徳の時間」を意識することで、生徒に生活や生き方とつながっているものという意識や実践意欲をもたせる必要がある。また、自らの将来に進んで生かそうとする姿勢を持てるような主体的な学習にする必要がある。

(2) 【検証の視点】 生徒は、自己肯定感・自己有用感を高めているか。

① 「自分にはよいところがある。」と答える生徒の割合は増えたか。

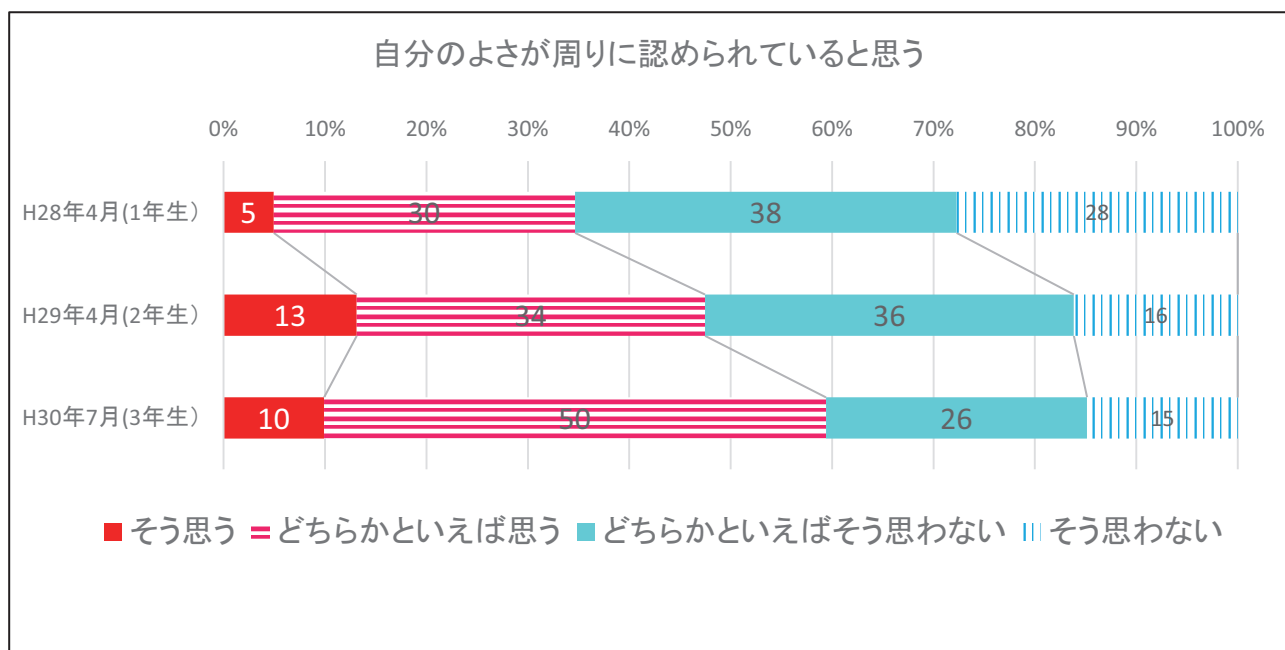
【検証方法】 生徒アンケート（平成28年度入学生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

② 「自分のよさが周りに認められていると思う。」と答える生徒の割合は増えたか。

【検証方法】 生徒アンケート（平成 28 年度入学生生の経年変化）



道徳に関する生徒意識調査結果

【考察】

・「自分にはよいところがあると思う」の肯定的回答は、一年次 54%、二年次 55%と低く、自信の持てない生徒が多い。「自分のよさが周りに認められていると思う」の肯定的回答は一年次 35%、二年次 47%と更に低く、日常生活の中でも人間関係への不安がうかがえた。そこで最上級生としての自覚をもたせる指導とともに、リーダーシップをとる経験や行事での成功体験の積み重ねにより、互いに支えあう人間関係づくりや相互評価を進めてきた。また、様々な体験を通して考え、感じたことを、道徳の授業で道徳的価値に関する諸事象として捉え直したり発展させたりして新たな感じ方、考え方を表現することが、自分の道徳的成長を実感する機会となり、自己の存在を肯定的に受け止められるようになったものと思われる。「自分によりよいところがある」の肯定的回答は 67%、「自分のよさが周りに認められていると思う」の肯定的回答は 60%と自己有用感の高まりが少しずつではあるがみられる。9月末に追加の記述調査をしたところ、「自分の良いところ」には三年生の 78%、「自分が人の役に立っていること」には三年生の 66%の生徒が具体的な事例をあげて肯定的な回答をした。

(3) 【検証の視点】 授業者は、「道徳の時間」における指導と評価の一体化が図れたか。

① 「道徳の時間」を「深い学び」とするための指導方法の工夫、改善ができたか。

【検証方法】 授業記録

○自分の意見を持たせる

考えたくなる発問づくり

わかりやすい発問づくり

・・・教材研究による発問の精選

- ・キーワードにまとめさせる
- ・自分自身のことを想起させる
- ・その意見の根拠を考えさせる

「自分の意見を持つことができない」生徒に対しては

- ・考える対象・テーマを具体的に示す
- ・選択肢を提示する
- ・「〇〇さんの意見」について、どう思うか考えさせることで自分の考えにつなげさせる
- ・動作化・役割演技等で理解を深めさせる

○聞き手を育てる(人の意見を聞き、さらに考えを深める)

発表への肯定的な雰囲気作り

・・・・・・・・授業者の肯定的評価

- ・うなずきながら聞く姿勢
- ・発表した意見の根拠を同じ意見の聞き手に問う
- ・自分の意見との違いを考えさせる

「聞くことが苦手」な生徒に対しては

- ・ペアトークを活用する
- ・グループ内で役割を決めて、場の設定をする
- ・違いや多様さを対比的に示す構造的な板書により、必要な視覚情報に注目させて、理解を促す

○さらなる深まりをもたせるために、学んだ道徳的価値に照らして、自分の生活を振り返り、自分のよさや課題を把握させる

【考察】

・今年度、「深める」ことについては、「人間理解」「自己理解」「他者理解」「自然理解」について、自分とのかかわりで新たな発見をすることと捉えている。これらの道徳的価値について「当然のこと、もうわかっていること」と思っている生徒に新しい気づきをさせ、納得解をもたせるための工夫を、お互いの授業を公開しながら、考え実践した。

・「根拠を問う」ことにより様々な考えに触れる可能性が広がる。特に、同じ意見でもそう考える理由が人によって違うことに気づき、友達が発言した意見の根拠を自分の言葉で説明することで、違う意見の人に質問したり、思いを伝える場面がみられたりするようになってきた。

・一年分のワークシートを綴じた「道徳ノート」を配付することで、生徒はワークシートを毎回整理する必要がなく授業に臨めるようになった。どの生徒にとっても安心して授業に入れるという効果もあった。

・発表や書くことが苦手な生徒に対しては、授業中に個別の説明を加えて意見を聞いたり、授業後に感想を聞いたりしたことを、授業者が記録に残す必要がある。そのような生徒には、「あなたはどうか？」と問うよりも「誰の意見に似ていたか？」「〇〇さんの意見についてどう思うか？」という問いのほうが答えやすいことがある。友達の見意見を参考にさせるためにも、聞き手を育てていくことが必要である。

③ 「道徳の時間」の評価方法の工夫、改善ができたか。

【検証方法】 評価文の作成・提示

* 7月の三者懇談で「道徳科における評価」の案内とともに本人及び保護者に提示した。以下に具体的に提示した評価文の例と生徒と保護者の自由記述を示す。

<通知表にて提示することを想定して作成した評価文の例>

・授業では、積極的に発表や役割演技を行い、クラスの仲間が考えを深めることに貢献しました。様々な立場の視点から物事を捉え、「公」の場で生活するためには他者の意見も尊重しながら自分の意見を伝えることが必要だと考えることができました。

・常に「自分に重なる部分はどんなところだろうか」という視点を持ちながら、考えを深めていく姿が見受けられました。特に礼儀について考えた学習では、恥ずかしくて挨拶できない登場人物に共感しながらも、勇気をもって誰にでも挨拶できるように頑張りたいとの思いを強くしました。

・『落書きをどうする』の授業では、落書きがされた人だけでなく、その人の家族や周りの人まで傷つけてしまうという考えを持つことができました。心無い行動が、たくさんの人に迷惑をかけるしまうのだと、怒りをもって考えることができました。今後も相手の気持ちを考え、思いやりをもって行動していく姿を期待しています。

・多くの授業において登場人物に共感しながら考えた意見を積極的に発表することができました。周りの雰囲気になら流されず、正しいことを自分の意思で貫き通す生き方を続けたいと考えています。

・『風に立つライオン』の授業では、夢や理想の実現を目指して生きるとはどういうことかというテーマについて考えを深めることができました。何に対しても諦めないことや、自分の弱さに負けないということを大事にしたいという意見を持ち、自分の生活に置き換え、弱い自分ではなく、強い気持ちを持っていたいと決意することができました。

・授業では素直な気持ちで資料を読み、グループの話し合いや全体の意見交流の中で、道徳的な価値に迫ることができています。特に『おはようございます』では、あいさつとは単なるコミュニケーションツールではなく、自分の思いを伝える言葉として大切に扱わなければならないと、再確認することができました。

<評価文を読んだ生徒の記述の例>

- ・私は、自分の生活に置き換えて考えることができたと思います。そうすることで、授業が身近なことにも活用できて、役に立つと考えたからです。道徳ではさまざまなことについて学べるので、思春期の私たちにとってとっても大切な授業だなと思いました。
- ・私は「答えが1つではない」のがあまり好きではないので、友達の意見を参考に考えていました。少しずつ、自分でも考えられるようにしたいと思います。
- ・相手の立場になって自分の行動について考えることができていた、と書いてあってうれしかったです。これからもがんばろうと思えました。
- ・個別の授業内容より、全体的な評価のほうが知りたいと思います。
- ・自分の良い所がピックアップされていてどこの部分をのばせばいいか分かって良かったです。

<主に道徳科の評価に関する保護者の意見>

- ・「他者との比較ではなく、個人内評価とする」ことで、授業や親以外の人にほめてもらったり、評価して励ましてもらうことは、中学生などの心の成長期にはとても良いことだと思います。
- ・価値観の違いなどもあり、道徳教育自体が難しくなっていると感じます。個人が内面を見つめ自分と向き合う内容となり、認める形での評価を期待します。
- ・道徳の時間は自分と社会を見つめるよい時間だと思います。しかしそれに対しての評価が必要かと考えるとどうなのでしょう。自由に考え、発言し、自分の考え、他の人の考えを聞き、先の人生に生かせるものになると良いと思います。
- ・評価文を読んだだけでは、授業の様子があまり伝わってきませんでした。道徳の時間は生きていく上でとても大切な学びを得ることができると思いますので力を入れていただけると嬉しいです。
- ・評価文だけでは学習内容はあまり分かりませんが、娘が授業を聞いて学んでいることがわかり安心しました。道徳は個々に感じ方考え方が違い、はっきりとした答えもないと思うのでたくさん話し合いをして、子供達の意見を引き出してあげてほしいです。
- ・評価をしようとすることによって、個々の考えを掘り下げることができるかもしれないが、もしかすると子どもの文章力の差が評価に影響を受ける可能性もあるのではないかと感じます。

<主に道徳教育や道徳の授業に関する保護者の意見>

- ・人には様々な考え方がありますので、お互いを認め合い、協調性を伸ばす道徳教育を望みます。
- ・道徳は、生命を大切に作る心、善悪の判断を学ぶ教育として不可欠だと考えています。
- ・自分の気持ち、相手の気持ち、道徳的な意見や思いを考えるのは苦手なので、このような時間があるのは良いと思います。
- ・自分たちの周りでいろんな事が「デジタル化」されていく中、やはり道徳の様な“自分を見つめ直す”授業は必要だと思いました。このまま「信念を貫く」等考えていって欲しいです。
- ・皆との話の中で色々な考え方があつた事に気づく事や自分の考えを持つ、人の話を聞くなどに重きを置いてほしいです。
- ・人に何かしてもらったら当たり前だと思わず、感謝の気持ちを持つことや人への接し方など、道徳で自分自身も学習させてもらえたので良いと思います。

・授業で学び想うことや考えることは大切な一歩だと思います。でも、それだけではダメで、いかに動くか、どう動くかにつながっていかないと道德の徳にはならないかなと思います。現代の子達は頭でっかちですから。

・私自身多感な時期に学んだ道德の授業は、その後様々な場面で思い出すことがあります。スマホなどの普及で、人と人の直接のつながりが希薄となりつつある今だから、道德を学ぶことは子どもたちにとってとても大切なことだと思います。

・自分の経験にないことや難しいことは人の意見に流されてしまいがちだと思います。道德教育を通して他人事ではなく自分の事として学んでほしいです。

・道德の時間という形で、今現在の自分の置かれている状況、周りで起こる問題、それに伴い様々な考え方、選択肢、進むべき道を息子なりに感じて帰ってくるようになりました。学校であった事はあまり口にしない子ですが道德で感じたことはいつも話してくれます。こんな考え方もこんな生き方もあるのだと知る事ができ、心が育っていく子ども達には、なくてはならない時間がまさに道德だと思います。

【考察】

・「評価文の作成例」に挙げたように、印象に残った授業の振り返りを生徒にさせたことで、生徒自身の印象に残った授業の様子を軸に評価文を作成することができた。しかし、「自分はそのままで考えていない」等のずれを指摘する意見も見受けられた。見取りの力や授業改善により、認識のずれを埋めていく必要がある。

・授業に参加していない保護者に限られた字数で授業での様子を伝えることは簡単ではない。学年通信等により、普段から道德の授業を積極的に伝えるなどの工夫が必要である。

・道德教育や道德科に関する多くの関心・期待が保護者から寄せられたことは、学校における道德教育に対する期待の大きさを改めて痛感したところである。一方、評価については不安や疑問の声もあった。こうした不安に応えていけるように、趣旨説明を続けるとともに、評価自体の妥当性・信頼性も高めていかななくてはならない。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

・道徳的価値を自分のこととして考えさせるために、ねらいの吟味、中心発問はもとより、その後の問い返しを意識した授業づくりをすることができた。また、授業の中で自我関与させたり、考えの根拠を明らかにさせることで、多様な価値に気づかせ思考を深めさせることができた。自分ごととしてとらえさせる主体的な学びについての共通認識が図られた。

・ティーム・ティーチングによるローテーション道徳を取り入れることで、組織的な授業づくりの基盤を作ることができた。特にティーム・ティーチングにより、きめ細かく生徒へ問い返したり補足の質問をしたりすることや、個に焦点をあてた支援が可能となった。更に、T1とT2の両方の立場から授業実践したり、授業者の授業記録と生徒の授業ノートを蓄積したりすることにより、授業改善の方向性を検討することができた。

・自己肯定感や自己有用感の高まりにおいては、全校として、7月末の調査で「自分にはよいところがあると思う」には65%、「自分のよさが周りの人から認められていると思う」には58%の肯定的評価となっている。9月末に再度記述式アンケートを行ったところ、「自分のよいところ」が84%、「自分がまわりに役に立っていること」が77%の肯定的な記述回答があり、自己肯定感・自己有用感の高まりが見受けられた。

・道徳科の評価にむけて、実際に評価文を作成して、生徒・保護者に教科化の趣旨とともに提示することができた。作成にあたっては、評価文に根拠をもたせていくための記録や資料について共通理解を図ることができた。評価にむけた研修を実施することで、評価に値する授業をすることが土台であり、授業と評価の一体化を図る授業づくりが重要であることを確認することができた。

(2) 今後の課題

・個々の生徒にいかに深く考えさせるか、特に理解した道徳的価値を自分なりに発展させていくことについては、「学び続ける姿勢」を育てることも課題である。「考え続けたい」と思える問いにしているためには、道徳の時間を要とした他の教育活動との有機的な関連も授業者が明らかにしていく必要がある。このことは、道徳の時間で身につける道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度と実際の場での道徳実践の指導が関連していくことにもつながり、生徒の道徳性の成長にもつながるであろう。

・生徒は他者の意見を聞いて自分の考えを深めている。同じように、自分の意見を発表することにより学級の深い学びにつながっていくという実感をもたせていくことが課題である。生徒同士の意見の付け加えや対比といった交流をさせることにより、道徳の時間を「お互いの成長を実感できる場」にしていく必要がある。

・自己肯定感や自己有用感に対する意識調査では、否定的回答者は固定化している。この中の多くは、一見、日常生活の中で、リーダーシップを取ることが積極的に見えたり、集団のための支えとなる行動を意欲的にしているように見えたりする生徒である。自己を厳しく評価する力があることの裏返しとも考えられるが、彼らが自分の行為に自信を持てるようにすることや、安心して自分を表現する環境設定を進めることが課題である。

・来年度の「道徳科における評価」は今回の試みより評価期間が長期になることから、更に「大きくくりなまとめ」を意識しなければならない。成長に係る記録はもとより、学級担任として成長を支える人間関係づくりが、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取っていく土台となるであろう。

・保護者からは、道徳教育や道徳科に対する関心・期待が寄せられている。今後も真摯に生徒に向き合う中で、より良く生きるための基盤となる道徳性を養っていきける場でなければならない。尚、「道徳科における評価」は、道徳教育全体の評価ではないことや、道徳的価値や道徳性を評価するものではないことについては、道徳教育に関する積極的な情報発信と共に説明を続ける必要がある。



おわりに

本校は平成 29・30 年度の 2 年間、東広島市教育推進指定校として、平成 31 年度から特別教科として位置づけられる「道徳」の授業のあり方に関して、生徒主体の対話的で深い学びの構築、自己有用感を育む授業の姿の具現化、そして評価のあり方に向けて、全教職員が一丸となり、研究を進めて参りました。

研究主題を「主体的に学び、自己有用感を育てる道徳教育の創造～『考え、議論する』道徳の指導及び評価の工夫を通して～」と設定し、香川大学教職大学院教授 植田和也先生のご指導のもと、特に「対話的で深い学び」をめざし、「考え、議論する」道徳の指導方法の工夫・改善に努めるとともに、個人内評価に重点をおいた建設的な評価のあり方について研究し、新しい時代を担う子どもたちの新たな学びを追求する授業改善の工夫を行って参りました。

今回の研究公開では、その一端をご覧いただけたのではないのでしょうか。

また、今年度から、広島県においては「広島版『学びの変革』アクション・プラン」が全県展開となっており、本校では、目指すべき主体的な学びの実現、課題発見・解決学習を全学習領域において、その内容の充実を図っているところでもあります。

本日、ここに研究実践の一端を公開し、皆様のご批正を賜りながら、今後に向けまして一層の工夫改善を重ね、実践を深めて参りたいと考えております。

最後になりましたが、この研究推進にあたりまして、貴重なご指導を賜りました、香川大学教職大学院教授 植田和也先生をはじめ、広島県教育委員会、東広島市教育委員会、関係諸機関の先生方、様々な活動を支援いただいた地域、保護者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 11 月 22 日

東広島市立志和中学校

教頭 中山 知 巳

ご指導いただいた先生方

香川大学教職大学院	教授	植田 和也 様
兵庫教育大学大学院	教授	谷田 増幸 様
広島県立教育センター	指導主事	金子 京子 様
東広島市教育委員会	参事	豊崎真理子 様
東広島市教育委員会	指導主事	田川 至孝 様
東広島市教育委員会	指導主事	鷹橋 忠文 様
東広島市教育委員会	指導主事	西村 尚子 様
愛知県あま市立七宝小学校	教諭	鈴木 賢一 様

平成 29 年度 研究同人

森岡 勝司	奥田 凌子
倉田 明彦	中邑 徳之
笠原 有子	村山 千恵
橘和 照泰	寺廻 憲志
黒河 俊信	谷田小夜子
小野 祥子	榎田 晃輝
佐藤 啓哉	二宮美智枝
毛利奈美子	白井 幸江
山垣内智彦	西原 千秋
藤原みのり	岩村 聡
湯場 茂樹	川原 民恵
池田 恵子	ブリアナ・ジェニンズ
石井 舞	

平成 30 年度 研究同人

森岡 勝司	黒岩 賀仁
中山 知巳	寺廻 憲志
水岡 弘美	谷田小夜子
藤原みのり	二宮美智枝
小笹 聖二	白井 幸江
池田 恵子	西原 千秋
佐藤 啓哉	山田 晃靖
沼田 満穂	川原 民恵
小野 祥子	石井 舞
山垣内智彦	ブリアナ・ジェニンズ
毛利奈美子	クリスティン・ノビン
橘和 照泰	
奥田 凌子	